

# 十月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

スマホ嫌ひ

後藤 美子 北海道

車やめ免許返上して一年連用日記に〈記念日〉と記す  
ゆつたりと心ゆるめて生きなむとねがふ今日より八十八歳  
しづかなる暮しねがひて疎みつつ従はむか同調圧力にも  
小樽まで出でゆける夫スマホ嫌ひ電話ボックスより「バスを待つてる」  
あたたかき寝床に入りて目をつむるわが生の一日かくてをはりゆく

バタフライエフェクト 藤野 早苗 福岡

瓶覗色の眼の男来ていま聖戦をはじめと言ふ  
甘辛くカボチャを煮上ぐたらちねにこの世の未練生まれるやうに  
あちこちの劣化はげしくああ今朝は鼻腔毛細管が切れたり  
とは言へど鼻血はすでに止まつたし残世のいちばん若き日を生く  
バタフライエフェクト とほくの戦争で夏を瘦せゆく日本の子ども

ほなほな

水上 芙季 神奈川

青色のはさみを使ふ夫なり(水上ふき)と書かれたはさみ  
結婚してそうろりと否、歴然と老いが近づく 河のある町  
「ほなほな」と言つて夫はほなほなとした足取りで坂下りゆく  
ごめんなど謝りながら笑つたり顔しかめたり酔ひどれの夫  
暗闇で手をつなぎつつこの人は何者だらうと暗闇を見ぬ

ねむれる種

松尾 祥子 東京

猛暑日の朝に咲きたるマグノリア草木も人も狂ひはじめて  
甘酸ゆきプラムを齧りそのなかに一つねむれる種を舐りぬ  
爆撃のやまぬこの世に咲く百合の白さよ性善説信じたし  
寝るまへにわれも唱へん憎む人の幸せ祈る仏陀の言葉  
子に頼むスマホの操作かうやつてわれはだんだん母に似てくる

☆

☆

水島 晴子 兵庫

つくし見に行かうと言はれ後に蹤き畦あゆみけり ともに四歳  
「まだ出とらん」棒きれで草叩きつつ駆けゆく背よ 墨絵の記憶  
年したの従妹をまじへ三人でさわぎ遊びき疎開の日々を  
庭なかの土掘りかへし水はこび植ゑし捨苗葉はなびきけり  
知のワーカー視線直ぐなるひと逝きてのちなる日々や文月深まる

武田 弘之 神奈川

コロナ禍の夏をものかはカブトムシ庭のムクゲにむらがりあそぶ  
カブトムシの餌にとバナナ一房を持ち来てくれつお隣さんが  
在りし日の疑惑あまたを国あげて葬るための国葬ならん  
政党と某教団の癒着など隠されて国の政治はつづく  
生きてゐるだけで楽しき九十のわれに歌あり歌の友あり

高野 公彦 千葉

物忘れして茫と立つ高野氏よ人間失格、老人合格  
酒を欲る夢など見ない人生の、こよひも飲めりうつつの酒を  
歌ありて我は生かされ生きゆけりこの世は一首一会の如し  
ゆく河の流れは絶えずして元の水にはあらずわれは（ゆく水）  
年取りてなほ両耳は楽しむよエンヤ、喜多郎、バッハ、ユーミン

奥村 晃 作\* 東京

猫避けのトゲ付き板を濡れ縁に敷き詰めて猫を坐れなくさす  
濡れ縁の下に猫さま入らぬようトゲ付き板を敷き詰めました  
三匹の地域猫今朝も走り回る建築待ちの褐き土の面  
三匹の地域猫わが庭塀の上を通路に歩いて行けり  
わが庭の薦に身を伸べ茶の猫が午後の時間を眠りこけてる

森 重 香代子 山口

もよもよととびかふ蝸に悩まされ読みつきがたし梅雨蒸し暑し  
平手打ちささく逃れし蝸の子が侮ることくまたきて止まる  
其みなさい、とわれは呟くわれの手にはたかれ死にし蝸にむかひて  
はやばやと湯浴みし横になりたしと夕づく頃をけふも思へり  
目覚しを二つセットし緊張し歌会にゆくこだまに乗りて

日影 康子 富山

夫逝きし寂しさにまた馴れざれば晝暗四時前に目覚めてしまふ  
七十年ともに暮して争ふこと絶えて無かりき笑顔の写真  
何ごとも息子にまかせ口出しせぬ夫にてありき寂かに逝きぬ  
早朝を正信偈・鎮解文仏前にあげて亡き夫と語らふおもひ  
朝露に足ぬれて歩む草の道哉草の花しろじろとつづく

古屋 祥子 群馬

狩野 一男 東京

薔薇園の薔薇の愛し一昨年をとしも去年も見入りてそを称へにき  
枝も葉もなにも奇妙と視えないが「ニンジンボク」とふその名が奇妙  
広瀬川柳しだれる下ゆきて連想は唐突「髻髪うなぬの乙女」  
雨ののち利根川の増水凄まじも堰越えるとき轟音となる  
濁流の過ぎたる跡か見覚えし大石が下手しもてへ少し移動す

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

荒梅雨のつづきのやうな雨の日々なにかを忘れなにかを恐れ  
図書館に老いの一人となりて読む「週刊文春」購入中止  
郵便局までの道あさがほの紫見つつ人思ひつつ  
生活の音なきマンション建ち並ぶ街となりたり神保町はや  
気の効いた地名東雲、有明の名付け親たれ歌人なりや

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

虚偽答弁くり返し逃げおほせたる策士めでたく国葬となる  
はやばやと国葬決まればあの世にて赤木俊夫氏に思ふらむ  
老いてなほ主我とげとげと保てるを老醜せうしといふ 振り返りみる  
日々こなす仕事はおほかた人のため わがためならぬを悦びとせむ  
熱帯夜を起き出でて飲む水道水なまぬるくわが喉くだりゆく

ふるさとの川口納豆スーパ一の棚から消えぬコロナに連れて  
あまた咲くあぢさゐのハラスメントやあかねさす昼ぬばたまの夜  
宮柵二の百日紅の季節なりやるべきことはやらねばならぬ  
百日紅色たくましく咲き、続く。駅までの道ゆきもかへりも  
「見よパワーハラスメントを」言ふ如く百日紅の金のくれなゐ

ウクライナの病院、学校もミサイルで破壊しやまぬプーチンロシア  
なんせきも空母をつくり海洋へ軍事進出やまぬ中国  
おたがひに非難、争ひなどはせず利用しあへるロシア、中国  
中国の空母を増やす目的のまづ第一は「台湾」奪取  
「台湾」を奪取した後中国の習近平の野望はいかに

贈りたる同じ羊羹いただきぬながらへて世に慣るるにあらす  
赤子泣き幼子叫び犬走る隣人家族はいま朱夏しゅげのとき  
把手てつかむ手は日ごと老いマンションの扉かどを出入りす隣人もわれも  
パソコンを閉ちて夜の窓ひらくときわれの正体あらはれんとす  
なにか夢みしがまつたく忘れたり別のわたしがパソコン開く

木畑 紀子 京都

早起きは朝顔、雀、われの順つゆぞらなれどけふもよろしく  
簾ごしにみる朝顔のうしろでのうすくれなゐのうなじうつくし  
混乱のきはみとなれるあさがほの葉と蔓の間に紺の真円  
生きがたきこの世なげけばあさがほの紺より白光びぢくわうの射す  
あさがほの花の底ひへ降りながら二匹の蟻が何かささやく

島田 暉 神奈川

おしやぶりを吸へる乳飲み子抱きかかへ母親逃ぐる地雷よけつつ  
病院や劇場などを狙ひたり白燐弾の火の玉の雨  
病院の瓦礫の中より引き出せる母子の屍体いまだ温とし  
コンピナートに押し込められし避難民ただ見殺しぬ殺さるる友を  
放られし屍体はいまも笛吹きぬいつしよに鳴ける梟の声

大松 達知\* 東京

死にたいよ、娘が言つて、死にたいは流行語よね、妻が言うなり  
ごばんさん！ ああ5番さん生きてる！ 顔あげてレバ串をたまわる  
英語ではチエルノービルでこれからもずつとおそらくチエルノービルで  
沖縄が一位だとして二位以下の示されてない記事を読みゆく  
「雲ひとつない青空」は「雲ひとつない青空は好きだけど」嫌だ

田宮 朋子 新潟

雪のこる谷間の風と似て非なり真夏まひるのクーラーの風  
通り雨すぎたる夕べくさむらに海の色せるつゆくさの花  
三千世界の一小宇宙すきとほるガラス鉢にてめだから泳ぐ  
ほんやりとした不安めくおもひ湧く一票投じかへりくる道  
苔玉のなかの榎なぎの木三年を出窓に生きて新芽を吹けり

津金 規雄 神奈川

とりどりのさへづり蔵し六月の森は水辺に横たはりをり  
池水を越え届き来るまぎれもなき三光鳥さんわうてうのほがらなる声  
月、日、星つぎひ、ホイホイホイと鳴くゆゑの三元鳥なり声のみのリアル  
熱帯系夏鳥にして渡来せる一小個体のいのちは火照る  
少年の日にあこがれし夏鳥を傾聴しをり二〇〇〇〇日経て

小山 富紀子 京都

鉾建つと聞けばうれしさわきてくる感染者数増すとは思へど  
かかりつけ医院は鉾の辻にあり名目立ちて鉾町ほこぢょうへゆく  
あかんなあ、あかんなあとは思ひつつ鉾の根際ねぎへと引き寄せられぬ  
月鉾つきほこ、函谷鉾かんこ、あつち長刀鉾ながやほこもうあかんコロナ禍ねまなんぞ忘れてしまふ  
宵山に行けばだれかにきつと逢ふあの夜肩にそとふれしひと

清水 正子 神奈川

風間 博夫 千葉

梅雨の日のスーパ―にありぬ南半球ニュージールランドの小林檜(ジャズ)が  
林檎好きにはたまらない旬の味覚さくさくと食む香に立つ(ジャズ)を  
リスナーのわれはおもひぬ林檎好きのピース又吉は多分いい人  
長岡の朋子さんも聴いてゐたかしら猫と一緒に「あとは寝るだけの時間」  
寝坊してブレックファーストは林檎パイ二分チンした牛乳も飲む

小嶋 一郎 佐賀

田中 愛子 埼玉

坂道を四十メートル登らねば家には着かぬ月よ背を押せ  
向かう側歩む女性に手を振りてわれには振らず選挙カー過ぐ  
傘二本手に持つ人と擦れ違ひその理由(二、三考へてみる  
ほどの幸せの香を放つ桃の実一つ妻に譲りぬ  
ヒゲ剃れときのふもけふも孫に言ふ何の返事もせずに出てゆく

福士りか 青森

橘 芳園 新潟

ヤマボウシ一夜にて落つ昨日までみな輝ける帽子だつたが  
けふ風は西の窓から 岩木嶺に雪なく雲なく夏に入りゆく  
親指の爪ほどの青き小蛙がへこへこ網戸をよぢのほりをり  
朝取りの「し」の字のキュウリ味噌つけてかじれば旬の夏の味する  
四肢のばし真一文字に眠りをる猫を計れば一尺五寸

ペダル踏み母は坂道のほりゆく前に後ろにをさなごのせて  
「餃子の日」日本記念日協会が認定したり「3月8日」  
「餃子の日」3<sup>み</sup>な8<sup>ハ</sup>ッピーギョウザの日「短歌の日」でもよろしいやうな  
どれだけの人と機械をわづらはせゆくのかポストに入れた葉書は  
人とわれ擦れ違ふときぶつからず相手避けずともわれが避ければ  
キッチンで肘と肘とがぶつかりぬものが増えたかわれらが太つたか  
功罪の罪は死をもて浄められひとかたに向くうつくしき国  
両うでをひろげて夫示すなりネットにて買ふ帯締め長さ  
さといもがやはくなるころ悲しみがきざしてきたり夕べの厨  
櫛は苦死に通じるゆゑに人さまにあげてはならずと母は言ひにき  
良寛が子らとあそびし大蓮寺境内の土踏みたくてきぬ  
キッチンもトイレもあらぬ五合庵聖をしのび人のぞきゆく  
国上より野積へ下る峠みち良寛が見し海の形見つ  
聖いま炊ぎいますか国上山朝けの谷にガス立つが見ゆ  
良寛さまたたへて言へど清貧をよろこびとする人の少なし